
水色のルーク

Okikiurmi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

水色のルーク

【Nコード】

N6343A

【作者名】

Okikiurmi

【あらすじ】

とあるペットの子犬の物語。ある日突然ペットが死んでしまったら、まだ歳の若い飼い主はどうなるのか。

（前書き）

この小説は死後の世界を描写した物です。当然、世界に存在するあらゆる宗教の持つ価値観を完全に無視しています。

そういう物に対して嫌悪感を感じる方や、小説の事を真に受け取ってしまう方はどうかご遠慮下さい。

それを承知した上でこれを読んで、気分を害されても責任は取りかねますので、どうか宜しくお願いします。

その日は、天気が悪れませんでした。

雨は降っていないけど、空がねずみ色に染まって、遠くで稲妻の轟く音がする。案の定、それから数分もしない内に、天気は崩れ、雨が降り注ぎました。

私の飼い主は大急ぎで家まで走って、大きな鉄の箱に、ぶつかりました。

どうやら、大怪我はしたみたいだけど、なんとか命は無事の様です。失った物は、ぼろきれみたいになった左腕と、僕でした。

今日は、ここに来てから大体、二ヶ月ちよい

今は、ここに来て知り合った先輩と、飼い主さんの様子を覗いています。

その先輩は、もう未練がないから後は待つだけだ。とか言っていて、少しの間ですが私と一緒に居てくれるそうです。

温もりはありませんが。

今更説明する必要も無いと思うけど、先輩によると、ここは、死んだ生命が完全に消えるまでの100日間、一時的にその魂を収容する場所らしいです。

名前なんかありませんが、先輩は”ツカノマ”って呼んでいます。

多分、名前が無いのは付けた所で100日経てば誰も知らなくなるからでしょうが。

神様が親切なのかどうかは分かりませんが、このツカノマは、おおざっぱに区分けされた内の同じ種族、そしておおざっぱに決められた同じ地区の魂しか見えないようです。

いや、先輩の推測なんですけどね。

で、僕はいわゆる、犬、小型犬

先輩も、犬、大型犬

しかも、先輩と僕は死んだ日の差が数日程度しか離れていません

だから簡単に言えば、先輩と僕は同じ近所で、同じ犬で、ほぼ同じ時期に死んだという事になります。

もしかしたら、散歩してる時にすれ違った事があるかも。

そうそう、先輩と”かつての”飼い主さんの様子を覗いてるって言いましたが、それにはちょっと御幣がありました。

死んだ後の空間とは言っても、見た目は今まで生きてきた土地と全く同じで、町の人達や飼い主さんの姿も生きている時と同じ様に見えます。

ベッドの上に座ったり人間に乗りかかったりも出来るし、飼い主さんの頬をべろべろ舐める事も出来ます、こんな風に。

・・・違う所があるとすれば、その気になれば壁や人をすり抜ける事が出来るとか、死んだ場所の地区から外には一切出れないとか、後は至極当然の事だけど、僕達は人間に触ったり出来ますけど、人間は僕達を触れないし、見る事も嗅ぐ事も聞く事も吸う事も出来ないから、気づく事が出来ません。

まあ、死んでしまった物は仕方ないし、あと一ヶ月ちよいで僕は消えるんだから、残りの時間は飼い主の様子を見る事だけしようと思ってます。

”お前、もしかして最後までアイツの事見るつもりか？”

僕が飼い主さんを見てぼーっとしていると、不意に先輩が話しかけてきた

”他にやる事が無いんだもん、遊んでたって飽きちゃうし”

そう言うと、先輩は無口になって、僕の隣に伏せた

”人間はお前に絶対に気付けないぞ”と諭す様に言いながらも、先輩もどうでも良いみたいで、僕と同じ様にぼーとし始めた

そのくらい分かってるよ　僕は飼い主が懸命にリハビリに励んでいるのを、ぼーっと見守った。

それから、数週間が経ったでしょうか

先輩の寿命（もう死んでるけど）はあとほんの少ししかないそうでも何もする事が無いそうで、僕たちはいつも通りに元飼い主さんの周りを付いて回っていた

飼い主さんの顔色はすっかり良くなって、腕は足りないけど元気に歩き回れるようになり、無事退院したそうです。

「タイインオメデトウ！コレ、オイワイヨ」

飼い主さんのお母さんが、人間の言葉で何かを言って、大き目の箱を取り出した

その箱は、なぜかゴソゴソと蠢いている

「！！！」

飼い主さんがその箱を開けると、中から出てきたのは元気な子犬だった

たくさんの人間に囲まれるという初めての状況に、きよろきよろと周りを見渡したりしている

「イイノ！？」

飼い主さんは、初めて僕と会った時の様な顔をして、言った

「ソノカワリ、コンドハヨルニサンポシナイデネ」

それから、飼い主さんとそのお母さんとその家族は犬を取り囲んで、ワイワイと談笑していた

”わー・・・元気になってる”

僕はそれを眺めながら、何となく呟いた

”・・・いいのかよ？”

そして、先輩がそう言って、僕の顔を覗き込んだ

僕は先輩が何の事を言いたいのか分からず、首を傾げた

”なにが？”

そう返すと、先輩はがっくりと頂垂れた

”分かんねえのか？あいつら、お前が死んで三ヶ月もしない内に、新しい奴を飼ったんだぜ？”

”・・・？”

そこまで言われてもよく分からないので、僕は先輩に問い質した

先輩は、ふ、と溜め息がちに

”つまり、あいつらはもうお前の事なんか忘れてたって事さ”
そう言った後、先輩は居心地が悪そうに、またな、と言って立ち去った

忘れた？

僕は今一度飼い主さん達を見た

「ソウイエバ、ナマエキメテナインダケド、ナンニシヨウ？」

「ア、ソウネエ・・・ソノウチ、イロイロトヨボウセツシユトカケンサトカアルカラ、アシタマデニキメチャツテネ」

人間達の言葉は分からないけれど、唯一つ、わかった事があった

飼い主さん達の言葉には、僕の名前が含まれていなかったのだ

”新しいのが入ったから、たまたま忘れてるだけだよね・・・”

僕は、そう呟いてから、飼い主さんの部屋の扉の前で、寝た

でも、ちよつとだけ疑問があった

いつもの様に

いつもの様に、飼い主さんのベッドの傍らで寝なかったのは、なんだろうか？

今日は、先輩が消える日だ

先輩の話によると、魂が消える瞬間、皆それぞれ違う色の光の粉になって、サラサラと砂みたいに消えていくらしい

血みたいに真っ赤な砂の犬もいれば、複数の色の砂になって消えていく犬もあるみたい

”俺あどんな色の砂になって、消えるんだろうなあ”

なんとなく飼い主さんの隣に居辛くて家の玄関先に座ってた僕の横に、先輩が語りながら歩み寄ってきた

”消えちゃったら記憶も何も残んねえだろうから、”死ぬ”時より気楽っちゃ気楽だよな”

”・・・成仏できずに悪霊になるかもしれないですよ、それでも

平気なんですか？”

僕は怪訝そうに問い掛けたけど、先輩はそれをひらりとかわす

” 実際、本当に霊とか成仏とかあるのかも疑わしいし、仮にあったとしても俺は全く未練が無えからな”

” 僕は寂しいです、僕もあと数日で消えちゃうけど、それまで一人で居られるのかどうか・・・”

僕の胸にわだかまる不安をよそに、先輩はだらりと伏せておまけにあくびまでしていた

” 案外、平気なモンだぜえ？お前が消えたって飼い主さんが死ぬ訳でも無し、ダラダラしてりゃあつと言っ間だしよお”

” うん・・・そうかもね”

すると、玄関の扉がガチャリと開き、中から 飼い主さんと、その腕に抱き抱えられた昨日の犬が出てきた

「マダアルカセチャダメヨ、ヒルカラビヨウインダカラ」

「ウン、ワカッター、イツテキマース」

今度の対話にも、僕の名前は入っていないかった

そして、飼い主さんと犬は、機嫌が良さそうに僕の隣をすり抜けて行った

やっぱり、忘れちゃったのかなあ・・・

” 先輩、先輩が消えるのって、何時でしたっけ？”

” 俺か？・・・日が沈む時だから、あと10時間だな”

” そうですか・・・それまで、ちよつと付き合って貰えますか？”

” 何だ今更？・・・いいぜ、行こう”

そして、僕は立ち去った飼い主の後を、先輩と一緒に追った

明るかった空は紫色になって、遠くの民家の奥に光るギザギザの太陽が、沈みかけていた

飼い主さんは家の中で、新しく加わった家族と、遊んでいる
そして僕は

”先輩・・・もう少しですね”

”ああ、そうだな”

覇気の失せた僕の声とは対照的に、当の先輩はさもどうでもいいかのように、言った

そして、既に半分以上が沈んでいる太陽を見て、眼を細める

”僕が死んでから先輩と居たこの100日の間、楽しかったですよ”

”正確には、95日と数日だけだな”

”どっちでもいいですよ、楽しかったのは事実ですし、それに・・・先輩のおかげで、飼い主さんに対する未練もなくなったので”

”！・・・”

僕が言うと、先輩は軽く驚いたように目を見開き、口を開いたオレンジ色の太陽は、いよいよ最後の一筋を残すのみになった

”お前・・・”

”？”

先輩が急に疑うような口調で言ったので、僕はびっくりと耳を振るわせた

”本当に、あの飼い主の事、どうでもいいって思ってるのか？”

”！”

そういつた瞬間、先輩の体が足元から、黒く光り始める

黒には、少しだが青も混じっていた

”・・・嘘だな”

”・・・ハイ”

先輩の体は、少しずつ黒と青に侵食されていく

”そんなに気になるんだったら、下手に距離を取るより、ずっと一緒に居た方がいい”

そして、ついに先輩は、完全に黒と青の犬の置物のようになってしまった

だが、声はまだ、聞こえてくる

”あいつがお前を忘れたとしても、お前があいつを忘れなけりゃ、赤の他人にはならないんだからな”

”・・・！”

そして、先輩の体からは黒と青の粉が舞い散り 消えてしまった
黒と青の粉は宝石の様に輝きながら、少しずつ大空に上っていった
”・・・”

僕は、頭の中で考えるより先に、玄関をすり抜けて行った

飼い主さんは、元気だった

新しい子犬のお陰で、飼い主さんは僕の生きていた頃と同じ様に

いや、それよりも幸せそうな感じがする

飼い主さんは子犬をサークルに入れて、家族と一緒にゴハンを食べ
ていた

片手しかないので、家族に手伝ってもらって食事をしている

割と静かな食事だったので、僕は何と無く呼びかけた

ワン、と、僕の耳に久しぶりに出す声が響く

だけど、飼い主さん達は気付かない

仕方ないか

話し相手の先輩が居なくなってしまったからか、自分でも知らない
うちに無口になっていた

そして、飼い主さんが家族に遅れてゴハンを食べ終わり、リビング
を出る

向かった先は、サークルの前 かつて僕が生きていた時も、同じ
様に毎日来ていた。

「ワン！」

子犬が、嬉しそうに吠える

飼い主さんはそれに応える様に子犬を抱いて、頭を撫でてあげる

ワン！ 僕も釣られる様に吠えたが、やっぱり気付かない

でも、目の前で子犬と飼い主さんが嬉しそうなのを見て、何度も吠
えた

ワン！ワン！ワン！ワン！ワン！ 何度も吠えたけど、全くの無

意味だ

だが、その時

無意味だと思つた瞬間、飼い主さんの顔が、くるりとこつちを向いた
そして、飼い主さんと、目が合う

僕は急にこの上なく嬉しくなり、嬉しそうにもつと吠えた

飼い主さんの腕が、僕の方に伸びる

やっぱり、無意味なんかじゃ無かつたんだ

そう思つた

飼い主さんの腕は僕の体をすり抜けて、僕の後ろにある水色のポ
ー
ル型のおもちゃを取つた

新品だ

僕が生きていた頃に使っていた物と同じ色だが、より色鮮やかで、
降るとカラカラと音がする

飼い主さんはそれと子犬をサークルに入れて、おやすみ、と言って、
立ち去つた

そうだ

僕は死んだんだ

あの日、あの場所で

大きな鉄の箱にぶつかつて、死んだんだ

死んだ奴が、生きている人に声を掛けたり、ましてや触る事が、気
付く事が、出来るはずが無い

絶対に。

僕は、飼い主が外に出れなくてガツカリしているそのすぐ傍にいた
雨は降っていないけど、空がねずみ色に染まって、遠くで稲妻の轟
く音がする

今にも振り出しそうだ

だけど、飼い主さんはどうしても外に出たかったみたいで、子犬を家に置いて、傘も持たずに行ってしまった。

当然、僕もそれを追う

コンクリートの道を歩く飼い主さんの左隣を、歩調を合わせるようにして歩く

こうしていると、生きていた頃を思い出す

そういえば、僕が死んだ時もこうだったっけ

すると、途端に雨が降り出す

飼い主は慌てて、大急ぎで家に帰ろうとした

だが、僕は本能的に危機感を感じ、飼い主さんの前に立ちはだかったでも、飼い主さんは僕の体をすり抜ける

僕はワンワンと煩く吠えたり、足に噛み付こうとしたけど、全部ムダだった

仕方なく、僕は飼い主さんと一緒に走り、家まで急いだ

その時だった

大きな鉄の塊が、交差点で猛スピードで走る

それは、あの時の光景だった

2つの光が視界を狭めて、鉄の塊が水を跳ね除けながら轟音と共にぶつかる

僕は咄嗟に、鉄の塊と飼い主さんの間に跳んだ

だけど、それは全くの無意味で、鉄の塊は僕をすり抜けて、飼い主さんに迫る

僕はコンクリートの地面に着地して 溜め息を付いた

飼い主さんは、間一髪の所で、助かった

鉄の塊は、それに一顧だにせず駆け抜けていく

飼い主さんはむくりと立ち上がり、何かを言いながら泥まみれになった体を動かして、家に帰った

家に帰ると、飼い主さんはそのお母さんにこっぴどく怒られた

何を言ってるのかは分からないけど、お母さんがこの上なく怒って、飼い主さんが微かに涙ぐんでるのは分かった

お母さんが落ち着いて立ち去ると、飼い主さんは泥んこの上着を脱いで、子犬のサークルに向かう
そして、いつもと同じ様に、子犬を抱いて、頭を撫でた
・・・もしかして、僕があの時生きてたら、子犬の代わりに僕が撫でられていたのかな
そう思いながら、僕は目の前の幸せな光景を、眺め続けた。

あの後、飼い主さんは風呂に入って、すぐにベッドに横になった
照明を消して、部屋は微かな月明りだけが照らしている
飼い主さんは横になってから僅か数分で眠りに就き、僕はその横で伏せている

眠る気にはなれなかった
死んだ僕には体力や眠気、疲労という概念は無いし、当然眠らなくても平気でいられる

僕は窓から覗く眉月をボーっと見つめ、尻尾を降っていた
そして、寝ているはずの飼い主が、唐突に何らかの声を発する
だが、やはりそれは、僕の名前ではなかった
生きていた頃は、僕の名前が呼ばれていたのに
やっぱり、忘れられちゃったんだ
そして、もうすぐ僕も、居なくなる

僕が消える
記憶が消える

赤の他人になる

その途端、僕の体が、急激に熱くなった
いや 正確には、眼と喉か
無駄だとは分かっていた

無駄でも良かったのかも知れない

僕は、窓から覗く眉月に向けて、自分の存在を、主張した
何度も、何度も

何度も

生まれて初めて耳にする、虚空を貫く様な、甲高く伸びる自分の慟哭
無我夢中で、叫び続けた

焼けるように熱い眼を、僅かな水が冷やす

でも、所詮貫いているのは、虚空だ

子犬も、飼い主も、気付かない

気付いてくれない

もし、本当に、私の飼い主だったのなら

どうか、僕に気付いて下さい

駆け寄って下さい

頭を撫でて下さい

水色のボールで、遊んで下さい

そして

また一緒に、歩いて下さい

今日は、僕が消える日だ

昨日はついつい気持ちが高まってしまったが、もう随分落ち着いた。
僕が消えるのは、朝だ

偶然な事に、飼い主さんが子犬と散歩に出かける時間と重なっている。

結局、何だかんだ言って僕は最期まで飼い主さんを眺めて消える事にした

僕は玄関先に座って、飼い主さんが出てくるのを待った

「ジャア、イツテキマース」

昨日の夜から長く長く待って、ついに飼い主さんが出てきた子犬ももう平気に歩けるようで、水色のリードをつけているボールと同じく、色は同じだけど、やっぱり新品だ。

その瞬間、僕の足元が光り輝く

白い光の所為で自分がどんな色の砂になるのか分からなかったが、今はもうどうでも良い。

そろそろ、さよならか

” さようなら、飼い主さん、子犬さん ”

そして、僕の体が半分以上侵食されると、目をゆっくりと閉じた

その時だった

「ジャ、オサンポにイコウカ、ルーク！」

それを聞いた時、僕は反射的に目を開いた

その言葉が、一体何を意味する言葉だったか、今となってはもう思い出せない

だけど、ただただ懐かしい気持ち胸を一瞬で満たしたのが分かる

そうだ、この言葉は

そして、僕の意識が無くなる寸前、自分の体から舞う水色の光の粉

を見た

その水色は

飼い主さんと外に出る毎日、僕の首に付けられた色

青草が生える河原で、飼い主が投げて、僕がくわえた色

そして、その時

飼い主さんと僕の頭上に広がる、空の色だった。

〈 f i n 〉

(後書き)

このHPには初めて投稿させていただきました。

初めてという事で、短編小説です。

ジャンルはファンタジーとありますが、剣と魔法の血が滾る様な熱い戦闘シーンを希望された方短編ですので、ご勘弁を(アワワワ今読み直すと、タイトルが分かりづらいかもしれないです、ごめんなさい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6343a/>

水色のルーク

2010年12月14日19時44分発行